



理事会だより(11・12)

- 一、秋の吟行会の実施報告(事業部、会計部)。
- 二、立春句会の短冊配布、集合場所は本丸広場。
- 三、梅まつり俳句大会の投句用紙を本日配布。多くの会員の投句を期待するとの理事の声あり。
- 四、第74回桜まつり俳句大会につき観光協会の大会実施への慎重な見解が池田会長から伝えられたことを踏まえ、事業部より梅まつり俳句大会と同様第一の事前投句募集のみとし第二部の俳句大会は実施せずとの提案を協議・決定した。兼題は桜・春泥、投句締切は2月27日(土)に決定。(詳細は次号にて)
- 五、小田原市制80周年記念表彰につき当協会が教育文化功勞として表彰されることとなった旨会長から報告。

理事会日程 12/10、1/14、2/9

定期総会予定 令和3年4月22日(木)

「俳句おだわら」10句抄(639号より)

大島美恵子 抄出

緑陰に5尺預けて憂いなし  
少しだけ魔女になりたしサングラス  
神宿る杉百幹に秋を知る

柳川 楊雨

秋風をききたくマスク取つてみる  
亡き人の名前で届く今年米

和田恵美子

秋の海生涯父は漁師たり

田淵 令子

賢治忌や星屑掬う終列車

勝木 澄子

稲の花日々を気負はず怠らず

中野 文子

秋雲やゆつくり降ろす大会旗

宮崎 悦女

何事も面倒な日や新走

石井きよ子

加藤かほる 抄出

池田 令子

こんな日は曾孫とねずみ花火かな

高橋久美子

夕映えや鮎釣り人の切絵めく

山口安規子

倒れても燃え尽きるまで鶏頭花

加藤れい子

秋暑し音の重たきシュレツダー

瀬戸とみ子

静けさや秋蚕四度の眠みにつく

石井千代子

レジまでの矢印に附く残暑かな

吉田 百代

遣されて老いて夏草茂らせて

庄司 下載

来迎の二十五菩薩裸足かな

村場 十五

本堂はいつも全開蟬時雨

木村 和彦

忍者出てきそうかまつかの闇の色

佃 悦夫

一ノ瀬茂代  
杉山あけみ

加藤 健治

力まずに身辺整理竹の春

柳澤ミサ子

竹は秋になると若竹も成長し、親竹もまた枝葉を茂らす。このことから「竹の春」は秋の季語である。

そして人は秋になると物思いにふけるものである。特に八十路を越えたとその感情は尚更である。

さて人は家族や仲間に囲まれて生きている。年を取ると回りの若い力に圧倒され、また余命を考えて、身辺整理をする気持ちになる。

この句は「竹の春」という季語を用いて年寄の置かれていた立場と心境を表現している。

ひたひたと月の真下を上り鮎

故森 正勝

母と修す父の遠忌や百日紅

守屋 まち

車返上町を歩けば風薫る

柳川 楊雨

辣韭の花や晩年足早に

山口安規子

秩父路へ一人遍路やかたつむり

山口 千代

さざなみや幾何学模様蝸蚪の陣

山崎 悦子

半生の録画短し石菫の花

山崎美知子

幸せのひとつに多忙賜猛る

山田 照子

梅ほつほつ農具の手入れ始まりぬ

若村 京子

背伸びから始まる一日梅日和

和田恵美子

野蒜和へふるさとの香をいとほしむ

和田 瓊子

河本 純子

木の芽和へははの好みし藍小鉢

和田 瓊子

作者の母は生前、藍小鉢がお好きで、木の芽和を盛るときに、なつかしく想い出されたことでしょう。私の母は今、卒寿で元気にしてくれています。この句を読んで母との想い出をたくさん作って親孝行したい気分になりました。私の母は花を育てるのが生きがいで庭にはいつも色とりどりの花々が咲いています。

あと数年かもしれない母の命。それを思うと楽しい日々を暮らしていきたいです。

夢追うて果てなく卒寿初明り

柳川 楊雨

ドーナツの穴まで食べて山笑ふ

山岸 秋光

茶の花やわれに寄り添ふ杖の音

山口安規子

佐保姫の訪問介護眩しめり

山口 千代

大夕焼老の余白を染めにけり

山崎 悦子

オカリナの澄みし高音や寒明くる

山崎美知子

湯治場のミルクとパンと山葡萄

山田 照子

一服の玉露の香りさくら餅

吉田 百代

爽やかや青を分かちて空と海

吉田 康雄

豊年や箱紐解けば萩茶碗

米山 翠

日記買う苦楽一年楽しみに

和田恵美子

## 北村文江

けふと言ふ画布いっぱいに滝の音

山田 照子

何とさわやかな句でしょう。今日一日を「画布」

で表し「滝の音」で締めくくっている。一物仕立の句

に一気に落ちる滝の音が胸にせまってくる。私は思

わず熊野古道にある雄大な那智の滝を思い浮かべた。

掲句は読み手をいろいろな世界に誘ってくれると同

時に、自然の雄大さをはみ出る位に讃えています。

作者は何を画布に書かれたのでしょうか。きつと

良い事があつたのでしょうか。ちよつと聞いてみたく

なりました。

伊豆相模振り分けにして枯れ岬

故森 正勝

樹木葬なければ白花さるすべり

守屋 まち

あぢさゝに癒され明日は視野検査

柳澤ミサ子

ドーナツの穴まで食べて山笑ふ

山岸 秋光

佐保姫の訪問介護眩しめり

山口 千代

どつと落つ滝に雄ごころ見たりけり

山崎 悦子

石段のいち段ごとに秋の声

吉田 百代

結び上げし少女の髪や初稽古

米山 翠

轉りや筆に空色たつぷりと

若村 京子

日記買う苦楽一年楽しみに

和田恵美子

水無月の水に影置く至仏山

渡辺喜久枝

## 田下昌人

豊かなる土偶の尻や夜這星

守屋 まち

素朴な願いのぎつしり詰まった土偶。そこへ夜空

の神秘・流れ星の異称「夜這星」の土俗的表現の衝

突だ。その光と余韻。共に豊穡への思いが交錯する

一大スペクタクルだ。

火焰式土器と土偶。はるか縄文人の禱りと創造性

のDNAを私たちは確かに受け継いでいる。そして

掲句はそれらを改めて思い出させてくれる。

故郷は今も単線さくらんぼ

故森 正勝

日帰りの乗り継ぎプラン日の短

柳澤ミサ子

水平線やはらかにして恵方かな

山岸 秋光

鬼灯を鳴らし成行まかせなり

山口安規子

甘食のゆるき円錐今朝の冬

山崎美知子

十月の明るさ永遠に夫の留守

山田 照子

地境は人の世のことうまごやし

吉田 康雄

図書館にさがす花の名小鳥来る

米山 翠

学校の小さく見ゆる花吹雪

若村 京子

秋晴や歯を爪を見せパンダの子

若村 京子

白梅の一枝挿しある懺悔室

渡辺喜久枝

※合同句集鑑賞は今号で終りです。ご協力ありがとうございました。(広報部)

## 瀬戸正洋句集『亀の失踪』管見

畠 梅乃

瀬戸正洋第六句集『亀の失踪』を拝読する機会を得た。とても凝った句集なので、鑑賞に入る前に少し紹介したい。まず驚くのは表紙だ。本文とは上下逆さまに印刷されており、開いた途端読者を惑わせる。また目次は、「かごめかごめ」に拠ったと思われる章のタイトルに、亀の句が一つずつ付されており、統一性が感じられるようになっていいる。句集名はその中の一章うしろの正面 炎天の神楽坂 亀の失踪によるものだろう。さらに後記は、

これからは、人に係わることなく生きていけたらと思う。

と結び、他者の理解を徹底的に拒んでいるようにも思える。富樫鉄火、川村蘭太両氏が跋と思われる文章を寄せているが、これを読むと、作者は乞われても全く自句自解をしない人物だという。「正洋の俳句とはプロットを提示することであり、あとはいかようにも読者がストーリーを組み立てればよい」とは川村氏の弁それならば、筆者なりに正洋俳句を鑑賞させていただけことにしよう。

まず、リフレインの三句。

烏瓜だんだん昏くだんだん暗く

他人になりたくてなりたくて海鼠  
ビーチパラソル同じ時刻に同じ曲

一句目、「烏瓜」と「だんだん昏くだんだん暗く」のリフレインのみで構成されている。最初の「昏く」、次の「暗く」。「昏く」は薄暗くなってきたてよく見えない、「暗く」は闇に閉ざされて全く見えないといった意味。だんだんだんだん、どこまで暗くなるのだろうと思わせる、実に巧みなりフレインだ。暗闇の中で目を凝らす作者、烏瓜が灯つても、見えるのは異界への道だけなのであろう。

二句目、後記からは確かに信じ難いが、作者は他人になりたいと思っているのか。「海鼠」は季語であると同時に、作者自身の投影なのであろう。他者の理解を拒みつつ他者になりたいと切望する作者、海鼠の棲む寒々とした海底を思えば、「なりたくてなりたくて」が悲痛である。

三句目、一読、流行に流される若者を皮肉った句のようにも思えるが、近未来的な恐ろしさがあるようにも感じられる。海水浴場にビーチパラソルが整然と並んでおり、ある時間になると、一齐に同じ曲が流れる。ビーチパラソルの中には、同じようなカップルがおり、同じようなサングラスを掛け、同じようにカクテルを飲んでいる。しかし会話は無い。本当に人間であろう

か。そこまで想像するのは行き過ぎかと思いつつ、「同じ」「同じ」について引き込まれてしまふ。

次に差異にこだわった二句。

風薫る右目と左目とは違ふ

散歩同好会軍手と手袋とは違ふ

一句目、両目で見ていると気がつかないが、もともと右目と左目では見え方が違い、それを脳が合成して立体として見せている。右目と左目の違いにこだわった作者、ひいては「在るもの」と「見えるもの」の違いにこだわっているのである。「風薫る」季節に、何かを必死に見極めようとする作者がいる。

二句目、同じ物ではあるが、散歩するときを使うのは「手袋」で、庭仕事の時に使うのは「軍手」。ここにも、事物は見た目ではなく自身の価値観で決めるといふ、作者のこだわりが感じられる。けれど、「手袋」が古くなれば「軍手」になったりするのかもしれないと考えると、なんだかおかしい。

最後に、社会を切り取った五句。

電線は地下に潜りて如雨露かな

シビリアン・コントロール亀鳴きにけり

潮まねき貧困格差社会かな

にんげんの分際で何ができる晩夏

COVID - 19 十一月の黒いくれよん

一句目、地下に潜った電線はもう雨も風も鳥も見ることがない。電線にとつては安住の地であると共に退屈な牢獄であることであろう。そこに作者は如雨露で水を撒いてやっただけに違いない。独特のアイロニー。

二句目、数年前の日報問題に端を発した、「自衛隊に文民統制は効いているのか」という疑念を踏まえての句であろうか。「亀鳴きにけり」がどこ吹く風の自衛隊幹部を思わせる。

三句目、広がる一方の貧困格差。蝨の大きさが極端に違う「潮まねき」を、貧困格差社会の象徴と捉えたか。「かな」の詠嘆が響く。

四句目、五句目、現在未だ続くコロナ禍のこと。実際、COVID - 19 が神の仕業であれば人間に勝ち目はないが、それでも人間は戦わなければならぬ。大人は疲弊し、子供は抑鬱の中にある。「十一月の黒いくれよん」は、そんな子供の絵を思わせる。

以上、勝手を鑑賞してきた。本句集の帯には、

「よみもの」のような面白さ。

というキャッチフレーズが記されているが、まさにその通りの一書であった。時に、難解な作品に頭を悩ませてみると、

玉葱や深く考ると不幸になる

という一句が見つかったことを付して管見を終わろう。

山岸秋光遺句抄 (田渕令子抄出)

梅咲いて路傍の石も生きてゐる

黒豆の舌にとけゆく春みぞれ

雪解川くらがりの鯉向き変へる

初蟬や一番好きな木に止まる

蝸牛ときどき殻をたて直す

蜘蛛の囿の遠き白帆をとらへたり

青柿の墜つ一瞬のくらさかな

鯖鮎や影こんこんと廻る

にんげんより人間らしき案山子かな

寒卵五穀の粥に落しけり

茶の花や銀行までの薄化粧

鮫鱈の顎だけ残し吊られけり

「頑固一徹の中にも思いやりの秋光さん」

田渕 令子

山岸秋光さんは全身が俳句。俳句がすべて。ただ句作りに没頭する寡黙な人でした。鋭い感覚の作風は、私達青梅の会員が憧れても真似の出来ない透明感のある素晴らしい俳句でした。

私が俳句を始めた頃、秋光さんから「俳句は恥をかかないと上手になれないよ。」と励ましていただきました。それ以来、私の大切にしている言葉です。又カメラを持つてのお出かけが趣味。自然を愛し、句作りに一段と磨きをかけられました。

長年、旧国鉄に勤務し、退職後は俳句を楽しむに暮らしておられました。奥様に先立たれた後体調を崩し、晩年は施設に入られましたが、青梅月例会には欠かさず投句することを何より楽しみにしておられました。最後まで俳句に対する情熱を失うことなく、俳句人生を生き抜かれました。私達の道標しるべでした。

享年八十八歳 ご冥福をお祈りいたします。

先頭の蟻を一度も見えない

秋光

俳句おだわら(11・19メ切り、到着順)

◆鹿火屋(10・23)

木霊してくるくる水車秋行けり

鶏頭の真つ赤妬心の収まらず

初紅葉老いて手習ひ十曲目

函嶺の揚ぐ秋月淡きかな

荒地野菊風の躓く線路際

◆たけのこ(11・4)

夢を見た温きふとんは母の胸

同窓と主語なき会話菊日和

冬の暮10才の大往生

行き違ふ皆々マスクハロウイーン

後添えの姑の半生干蒲団

◆香雨・梅ごち(10・25)

人待ちのサイドミラーに今日の月

宇宙までつき抜けさうな秋の空

手招きをするがごとくに芒の穂

石臼のあをき匂ひや走り蕎麦

十月や葉裏も色をたくはへて

バス降りて子らの駆け出す秋の暮

久江報

足立 和子

川本 育子

高橋 小糸

山崎 悦子

近藤 久江

悦女報

三木 泰子

小宮 早苗

徳田 公子

久津間百合子

宮崎 悦女

忠山報

肥後ちさこ

関戸わよこ

青山 典子

門松 鳳文

乾 利子

吉田 百代

秋天や高きを競ひ二羽の鳶

照り翳るたびに色変へ芒原

敗荷をきくきく鳴らす濠の風

表札は今もそのまま金木犀

◆こよろぎ(11・12)

上賀茂の酢莖とどくや茶漬け食む

縫物に励む尼さまなつめの実

人はみなけふも旅びと鳥渡る

◆春野(10・18)

どこまでも鈍色の山曼珠沙華

永らへて退つ引きならぬ秋思かな

優しさは強さでもあり秋桜

天狼星胸に布石の一語かな

海峡を走る日照雨や牧水忌

かりがねや最北端の駅眠る

雀蛤となるおめかしをして

◆沈丁(11・7)

巢籠りの飯炊きをれば初時雨

旅先の白衣観音初時雨

付き添ひも共に老ひしや冬帽子

時雨るるや紅茶の香るカフェテリア

吉田 康雄

陌間みどり

小澤 純子

池田 忠山

つとむ報

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

きよ志報

伊藤はる子

尾崎 一夫

二見 和江

秋山 昇

瀬戸 悠

内田知江子

長谷川きよ志

文子報

寶子山京子

牧石美千雄

若村 京子

柳澤ミサ子

帰る子の息はづみけり初時雨

田中 恵一

茶のけいこ急ぐ私に初時雨

河本 純子

初時雨なんだかずつとここにいた

瀧本 敦子

初時雨訪なふ人もなき一と日

勝木 澄子

落書の壁もアートや初時雨

菅野 英余

よそゆきの笑顔が届く七五三

高井 幸子

秋草に奢る色なし備前焼

片野 節子

またひとつ老舗しにせの消えて初時雨

中野 文子

◆青梅 (11・4)

幸子報

夕紅葉隣人集ひ酒進む

大塚 行人

柚屋から初摺りの音里豊か

湯本とし子

ままごとの大皿となる朴落葉

和田 璵子

うそ寒の薄き胸元抱えけり

加藤まり子

鳥翔ちて日ごと深まる柿紅葉

久保寺トミ子

廃屋の鍵の錆れや柿熟るる

田渕 令子

北条の城の遠眺天高し

田中 幸子

◆みなみ (10・10)

かほる報

秋澄むや山間抜ける送電線

加藤 幸子

対局の動かぬ空気白障子

豊田 幸枝

水の声石の声して無花果熟る

市川めぐみ

赤い羽根家に帰りてすぐ外す

小瀬村信子

古民家の軒にこぼれて稲雀

斎藤 静

大袈裟に逃げて又来る稲雀

飯田 愛

新藁の香りしている仏間かな

加藤 健治

のっぺりな野仏の顔稲雀

加藤れい子

閉じ籠る癒しは色変えぬ松

村上 龍山

むらさきに母郷の昀り銀木犀

加藤 富江

今更に三密などと南瓜割る

加藤かほる

◆おほる (11・12)

昌男報

振りむけば音の転がる柿落葉

石井きよ子

初雪の便り歳時記開きおり

石井千代子

稲架列が静かに立ちて夕陽さす

宇田川聖一

憂国論湯豆腐の角崩れゆく

小野 菊土

秋深し季の暮らしを重ねおり

香川 花子

柚子の照り庭の片隅明るくし

風間 秀泰

日の温み重ね合せて柚子黄ばむ

加藤 春江

立冬に負けじと励む老後かな

坂入清四郎

紅葉山湖の奥まで万華鏡

瀬戸とみ子

柿喰えば不老長寿の味のする

高橋みどり

纏れたる山芋の蔓風が解く

中津川晴江

人情のほど良い間合石露の花

中根登美子

櫓田の色を変えゆく群れ雀

中村 昌男

街路樹に紅葉のリレー続きおり

青春の淡き思い出野紺菊

◆開成(11・6)

本棚に青春の日々小春空

淡々と午後の法話や返り花

帰り花静かに秘かに咲いている

厨より八重山吹きの返り花

◆山北(10・29)

流水を川辺に集め秋出水

鉄格子鏝て幾年烏瓜

すぐそばに夜が来ている花八ツ手

追伸と書いて林檎をひとかじり

平凡に生きる安らぎ神無月

秋うらら杉戸に遊ぶ白い象

二人だけのグラス合せる敬老日

水引や猫見る猫を見ておりぬ

◆鷹(11・7)

二階家の連なる祇園秋深し

駅前那点字ブロック石たたき

みの虫の糞器用ともあはれとも

秋冷や朝刊配る音に覚む

廣田 悦子

二上 光子

ちわき報

下澤 操子

遠藤シヅ子

濱本 主雄

奥津ちわき

由里子報

柳川 楊雨

高橋 秋月

尾崎 竹詩

中山 妙子

和田恵美子

石田加津子

尾崎 幸子

竹下由里子

十五報

青木 孝子

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

水舟に濯ぐ指先赤蜻蛉

秋深し隣の稚児今日静か

能衣装まもる社や鹿の声

コンバイン手慣るる嫁御風やはし

指先に聴く砥音や秋深し

丁字路の石敢當や银杏散る

夕さりに暮る風雨や雁来紅

朝立に赤き沖雲浮寝鳥

新蕎麦や野花挿したる杉の卓

等閑の朝顔の種採りにけり

全集は死へと近づく萩の花

養生の一念ゴージャ苦きかな

パソコンを孫に教はる夜の秋

落草の中に猫ねる小春かな

温厚な犬の系譜や蓼の花

村の子の初焼く煙を突つ切れる

静寂なる京の書院や紅葉晴

初殻焼く足柄平野風わたる

駅裏のおでん屋鳩のふくみ声

坐す時も「よいしょ」と声や栗ごはん大木

波郷の本書架に並ぶや秋の宵

須田 晴美

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

庄司 下載

瀬戸 りん

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

畠 梅乃

山口安規子

市川 好子

大島美恵子

田下 昌人

中根 和子

高橋 正子

西村 英子

米山 翠

敬子

加藤 幾代

秋蝶や一茶の句碑に翹たむ  
声にして出掛けの準備翁の日

畔道の溢るる荷台薩摩薯

潮騒の聞ゆる道や冬ぬくし

皮をむく熱き焼芋指踊る

路地奥の老舗食堂小六月

父逝きて母の時間や花八手

嵩うすき母の寝姿花八手

手を引かれ幼子歩く小春かな

サッカーの少年の声冬青空

富士になほ今日の日の色鷹渡る

八手咲く箱根古道九十九折

◆零(11・19)

うそ寒や唯一の被爆国なれど

柘榴爆ぜ「嫁」は死語となりそくな

おだやかに陽の光浴び糸芒

真赤な柘榴口に合わぬ酸っぱさ

新蕎麦や有名人の色紙あり

すくと立つ背筋の光る朝の鹿

最乗寺まると飲まる横時雨

夕暮れの木守柿とわらべ歌

北崎 修  
守屋 まち

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

近藤 絢子

杉崎 せつ

関根 琉子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

道郎報

青木たけを

岡本 史郎

井上 良子

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

木村 和彦

悪ガキが柘榴を放る好きな子に  
たか志報

伊藤 道郎

坂道や肩に食い込む蜜柑籠

廃校の裏山みかん鈴生りに

蜜柑山はるか沖行く貨物船

晴ればれと海の膨らむ蜜柑山

◆零(11・19)

重満報

黒卵車窓に映ゆる薄もみじ

曼陀図も工場夜景も石榴もか

山眠る欄干獣図の寢息

◆無所属

鳥渡る羽一枚の遺言状

赤松の山従えて土瓶蒸し

相席に交す会釈や走り蕎麦

泡立草限界集落追ひつめて

バス停は火の見前とや暮早し

秋桜やキッチンカーの列に付く

刺羽舞ひ名残惜しげに去りにけり

猿年の夫は似合ってちゃんちゃんこ

月光や立山連山を冴え渡す

菊日和今日はリュックの登校児

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

山口 千代

一ノ瀬茂代

北村 文江

蓑宮 わか

出澤 洋子

鈴木久美子

岩楯恵津子

石田 和代

澤口 文子

冠雪の富士のたいらや七竈  
久々に淡き紅ひく小春かな

須田 聡子  
木村美千代

十月桜雲ひとつなきけふの天  
約束の巨いなる木に雪の降る

山田 照子  
穂坂志げる

駅前氷河駅前氷河人なだれる

大石 和子

鳥渡る人間の鳴き声聞き分けつつ

大石 雄介

本意なき心と見たりマスクの眼

小澤 園子

ブルームーン詩を読むように上がりたる

田畑ヒロ子

鳥の声隣家の柿に夕陽射す

岡田 典代

立冬やトランペットがはじまると拍手

瀬戸 正洋

コスモスのほとんどピンク倦怠期

杉山あけみ

### 令和二年度年間ベスト一句集案内

一、全会員に、令和2年中の作品からベスト一句を  
自選していただきます。協会報とは限らず各人  
の全発表作品を対象として下さい。

一、各グループごとにとりまとめて下さい。グルー  
プの責任者には別途そのお願いをさし上げます。  
一、無所属各位は、広報部あて「ベスト一句集」と  
してはがきで送稿して下さい。

一、メ切り 令和3年1月15日（2月号掲載）  
一、送稿先 〒250-0042 小田原市荻窪五四九-17

小田原俳句協会広報部 村場十五

### 小林永以子

春愁や金平糖の角いくつ

齊藤 桂

因みに金平糖の角を数えたら、二十ヶ余りでした。  
春愁の物憂い思いから抜け出せない時季に、コロナ

禍の追い打ちで自粛の日々となり、作者の苦しさの  
深さが金平糖の角の数より強く伝わってきました。

一方でユーモラスな形と明るい色合いの金平糖を中  
七に据えられて、春愁の暗いトンネルの先の光を感じ  
させた手法に感服いたしました。

（令和2年5月号より）

共感1句

### 『零』句集第16集一句抄（令和二年五月発行）

独りでも生きて行けるよなあ蜥蜴  
鳥帰る還らぬ鳥の天空を

木村 和彦  
青木たけを

限界集落婆眠る山眠る

伊藤 道郎

あらすてき台所にも梅の花

井上 良子

秋の声ハンセン病問う樹木希林

岡本 史郎

充ち満ちて羽ふるわせて巢立鳥

川合 昌子

亡き母に問うこと多し秋の声

佐藤 正子

跳ぶ勇氣飛ばせる勇氣巢立かな

中村 裕子

巡礼の背中膨らむ伊予の道

野川木一路

## 第57回小田原梅まつり俳句大会

兼題 「梅」「鴉(かいつぶり)」「(いずれも傍題可)

各一句一組、未発表作品に限る。

締切 令和三年一月四日(月) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子三〇三五―七

田畑ヒロ子宛(☎〇九〇―四五四三―五〇三三四)

\*作品は原稿どおり印刷しますのでご注意ください。  
さい。(楷書で、大文字・小文字もハッキリと)

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 県知事賞以下二十位、選者特選賞

作品集 投句の皆さまに後日送付致します。

\*新型コロナウイルス感染症対策に鑑み、令和3年2月

7日に予定の第二部俳句大会は中止し、今回は第

一部の事前投句募集のみです。奮ってご投句くだ

さいますようお願い致します。

〈主催〉小田原市観光協会 〈主管〉小田原俳句協会

〈後援〉各地俳句協会

(お知らせ) 令和元年度年間ベスト一句集からの抄

出・鑑賞につき原稿ご協力ありがとうございます。

誌面の都合により掲載は一月号以降となりますのでご

了承下さい。(広報部)

## 立春句会のお知らせ

日時 令和三年二月三日(水) 雨天決行

集合 小田原城天守閣本丸広場前 十一時

・短冊つるし後句会場にて投句・短冊は11月理

事会にて配布(立春・梅に因んだ句。1月ま

での理事会または当日に持参下さい。)

会場 小田原市民センターUMECO第2会議室

\*飲料以外の飲食は不可のため各自食事を済ま  
せ、マスク着用。

会場利用時間 13時～16時(受付13時)

会費 五百円(賞品代等)

投句 当日瞩目3句を短冊(受付にて配布、締切13時30分)

句会 14時より総互選

\*事前申込の必要はありません。お仲間をお誘い合  
せの上現地にご集合下さい。

■訂正 10月号1頁寶子山京子抄出の一句および

11月号9頁実のりの岩本ひさみ句は、正しくは次の通

りです。

棒立ちをすなり深夜の黴どもは

佃 悦夫

色鳥や少年樹々に叫びをり

岩本ひさみ